〔新刊書評〕

齋藤曉子著
『ホームヘルプサービスのリアリティ
―高齢者とヘルパーそれぞれの視点から』
生活書院，2015年

松　井　由　香

身体が衰えて他者からのケアが必要になったとしても，住み慣れた自宅で暮らし続けることを望む高齢者は多い．このような高齢者の思いが，実際の公的サービスの中でどのように実現されるのか．本書は，ホームヘルプサービスを対象に，その受け手である高齢者と与え手であるヘルパーの関係性に注目し，両者の認識を比較することで，受け手と与え手の多元的なケアのリアリティを析出し，両者の利害がいかに調整されている／されていないのかを探るものである．

本書は，著者が2013年度にお茶の水女子大学に提出した博士学位請求論文『ケアの関係性の再考―高齢者とヘルパーの視点からみるホームヘルプサービス―』を大幅に改稿したものである．本研究により得られた高齢者とヘルパーのペアデータは極めて貴重であり，両者の「語り」によって示された「多元的なケアのリアリティ」は，研究者のみならず幅広い読者に示唆を与えるものとなっている．

まず，本書の構成と各章の論点をかんたんに紹介しよう．本書は「はじめに」に続く７つの章で構成されており，その章立ては以下の通りである．

はじめに
第１章　高齢者とヘルパーの「語り」からみえてくるもの
第２章　高齢者の「介護」観
第３章　ヘルパーの「介護」観
第４章　ホームヘルプサービスはどのように調整されるのか
―サービスの範囲についての高齢者とヘルパーの認識の比較
第５章　高齢者とヘルパーの人間関係
―「仕事」と「友人」の狭間で
第６章　事業所が高齢者とヘルパーの関係性に与える影響
終　章　高齢者とヘルパーの視点からみたホームヘルプサービス

第１章は，問題背景を示しながら，本書が高齢者介護サービスのなかでもホームヘルプサービスを対象に，サービスの調整の現状と課題を検討することの意義を述べた後（第１節），高齢者介護およびホームヘルプサービスに関する先行研究の検討を踏まえて，本書の研究上の視座が示されている（第２節）．次に，研究の目的と検討課題を提示したうえで，次章以降の構成について述べ（第３節），最後に事例分析の素材となる調査研究の概要を示すという流れになっている．問題背景については，2000年に介護保険制度が施行されて以降，介護サービスの与え手と受け手の利害を両者の間でどのように「調整」するのかという「新たな論点」（14）が関心を集めていることが指摘されている．そして，ホームヘルプサービスが，「ケアの場」はインフォーマル（在宅）であるが「ケアの関係性」はフォーマル（制度化された有償のケア）であるというフォーマル・インフォーマルの中間にあたるため，①高齢者による調整の余地が

施設に比してより多く残されており，②ほかの高齢者ケアの関係性を考察する手掛かりともなりうることから，本書の対象をホームヘルプサービスとするとしている（15）．次に，先行研究の検討からこれまでのホームヘルプサービスの研究では，ケアの受け手・与え手の両者の視点から相互行為として検討したものが非常に少ないことを踏まえて，本書では研究の目的を，両者の認識から，サービスの調整をめぐるリアリティを明らかにしつつ，その構造的要因をミクロな関係を中心に，組織レベル（メゾ）や制度レベル（マクロ）の視点も含めながら明らかにすることが述べられている（28）．そのうえで，本研究における３つの検討課題が設定されている．第１に，「高齢者とヘルパーそれぞれの介護の意味づけを明らかにする」こと，第２に，「高齢者とヘルパーのそれぞれの考える介護の水準が，サービス提供の場でどのように調整されているのか」について，「個別・具体的なミクロレベルのケアの相互行為を分析する」こと，最後に，２点目の課題である「ミクロなケアの相互行為や，ヘルパー側の労働状況に影響を及ぼすヘルパーの所属事業所に注目し，その影響の内容を明らかにする」ことである．これら３つの検討課題には，第２章から第６章までの事例分析を通じて答えていくという構成になっている．事例分析の素材となるのは，ホームヘルプサービスを利用している高齢者12名とその担当ヘルパー 12名，ヘルパーの所属事業所を含めた５つの事業者の代表者およびサービス管理者６名を対象に実施した半構造化インタビュー調査により得られたデータである．

第２章と，第３章は，第１の検討課題に対応するものであり，介護保険制度下における，高齢者とヘルパーそれぞれの「介護」と「ホームヘルプサービス」に対する認識から，ケアを受ける・与えることをめぐる両者の意味づけと，高齢者の期待する「介護」（第２章）とヘルパーの考える「適切なサービス」（第３章）の異同が明らかにされている．検討の結果，ホームヘルプサービスにおいて，日常生活を基準とした「普通さ」を求める高齢者と，制度的なケアを「仕事」として提供するヘルパーの視点の違いを見出した．

第２の検討課題に対応するのが，第４章と第５章である．高齢者とヘルパーのペアの事例を対象に，両者の考える「適切なサービス」がかれらの間でどのように調整されているのかを析出するという，本研究のオリジナリティがもっとも発揮された部分である．ここではホームヘルプサービスの内容が，高齢者の身体状況によって大きく異なることから，生活援助中心である程度自立した生活が可能な「軽度のケース」と，身体介護中心で日常的に他者の支援がないと生活が困難な「重度のケース」とに分けて分析するという方針がとられている．第４章では，「適切なサービス」をめぐる両者の認識の違いと，両者の間でサービスの「調整」がどのようになされているのかについて示されている．第５章では，高齢者とヘルパーの人間関係にかんする米国の質的研究の知見を導きの糸として，日本における両者の「関係性」について，かれらの認識をもとに比較している．分析の結果から，高齢者とヘルパーとでは，ホームヘルプサービスにおける人間関係の位置づけが異なっており，そのことが両者の齟齬を生じさせ，サービスの調整を阻む要因の一つとなっていることが指摘された．本書の知見は，米国での先行研究においてホームヘルプサービスの人間関係が重視されていたのとは対照的に，高齢者とヘルパーの親密性が低いことが示された．筆者は，このような日米間における人間関係の違いが制度的な状況から生じていると指摘する．つまり，日本の介護保険制度下のホームヘルプサービスでは，サービスの内容が細かく計画されており，計画の決定権がヘルパーではなくケアマネジャーに委ねられている．そのため，日本の厳格な規制のもとでは，ホームヘルプサービスにおいて高齢者とヘルパーが「個人的な関係性」を構築しづらい状況になっていると筆者は分析している．

第５章までは高齢者とヘルパー間のミクロなケアの関係性について検討がなされてきたが，

ホームヘルプサービスはヘルパーと高齢者の二者関係で完結するものではなく，ヘルパーが所属する事業所の組織上の特質からも影響を受けることが指摘される．そこで，第６章では，ヘルパーが所属する組織が，高齢者とヘルパーのケアの関係性にどのような影響を及ぼすのかを検討している（第３の検討課題に対応する）．その結果，ホームヘルプサービスにおける高齢者とヘルパーとの相互行為や関係構築は，ヘルパーの所属する事業所の特性や介護保険制度の規定によっても左右されていることが確認された．

終章は，これまでの議論を総括したうえで本研究の意義を示し，本書を結んでいる．

以上が本書の概要であるが，本書は研究目的に沿って３つの検討課題を設定し，事例分析をとおしてそれらの課題に対応していくという構成で議論が展開されており，学術論文を執筆する際には心強い道標となるだろう．

そして，評者が本研究から大いに刺激を受けた点は，ケアの与え手であるヘルパーだけでなく，ケアの受け手である高齢者の視点から両者の関係性を問いなおしたことにある．これまでの高齢者介護研究の多くは，その調査可能性という現実的な制約からケアの与え手側のみを対象とする場合が通例であった．高齢者とヘルパーのペアデータから析出された「語り」は，両者の相互行為の過程で生じた些細なズレや綻びのようなものを照射し，ホームヘルプサービスにおける「ケアのリアリティ」を多元的に把握することを可能にしている．本書の核となる「多元的なケアのリアリティ」とは，高齢者にとっての「生活の場」の重要性を問い続ける筆者の誠実なまなざしによって見出されたものである．そして，本書が提示した多元的なリアリティのなかには，今後の高齢者介護政策を展望したり，介護の現場において介護プランを組み立てたりする際には，その個別性の高さゆえに，ともすると優先順位の低い「ケア」として後回しにされがちなことも含まれているかもしれない．しかし，本書をとおして，高齢者にとっての「生活の場」にあらためて目をむけてみると，極めて個別性の高い，具体的な他者との相互行為のなかにこそ，高齢者の生活そのものを支え形づくることがらを見出すことができるのかもしれない．本書は，読者自身の「介護」観をも問いなおす一冊である．